

緒言に代えて

本書『論集 他界観』には5篇の論考を所収するが、うち4篇（犬木・田中・梯・今井論考）は、2013（平成25）年に実施された文化財学科（現歴史文化学科）の公開講座《他界観—東西文化が紡ぐ「あの世」のイメージ—》の内容に基づき、報告者の方々に新たに起稿頂いたものである。残る1篇（藤澤論考）は、論集の編集段階で、関連テーマによる執筆をあらためてお願いしたものである。刊行までの道のりは思いのほか難産であったが、ようやくここに体裁を整えることができた。

本論集のテーマである他界観は、古今東西、全ての地域・時代に共通する普遍的なテーマである反面、きわめて広範かつ多角的なアプローチを必要とする難しいテーマでもある。

以下、本論集に所収の論考5篇の内容について簡潔に紹介しておく。

冒頭の犬木論文は、古墳時代の埴輪配置を読み解く試論を提示する。埴輪配置は、古墳の意味を読み解き、彼らの他界観を考える上で、非常に重要な役割を果たしてくれる。犬木は、古墳時代の始まりから終焉に至る、列島各地の埴輪配置を検討した上で、全ての埴輪配置は、〈首長〉ないし〈首長制〉を物象化／実体化するための装置であると結論づける。「亡き首長」の〈靈威〉の「所在」ないし「存在」は、それ自体では物象化／実体化することが不可能であるため、「亡き首長」の外側にあるものやそれに付随するもの、あるいは「亡き首長」を結節点とする諸関係を、埴輪を用いて代替的・間接的・暗示的に表現すると見做す。このような理解に立つと、埴輪配置は、現実世界における「王宮」や「殯宮」をそのまま写したものではないし、不可視の「他界」の情景を表現したものでもない、という結論に至る。本論考では一部示唆的に言及するのみであるが、古墳は此界と他界を繋ぐ回路に他ならないという理解に通底する。

一方、田中論文は、仏教美術史の立場から、法隆寺に伝存する「伝橋夫人念持仏」について検討する。本念持仏は、須弥座と宮殿からなる厨子および宮殿内の阿弥陀三尊像で構成され、天平19（747）年の『法隆寺縁起並流記資材帳』に記載される「宮殿像」に比定される。氏は、本念持仏厨子および法隆寺金堂6号壁の親縁性を検討した上で、両者がともに阿弥陀五十菩薩像図の系統上にあると位置づける。その上で、この念持仏厨子は「現世に垂降した瑞像」に他ならないという結論に至る。このような推論に立てば、念持仏厨子に描かれたモチーフは、阿弥陀浄土そのものではなく、あくまでも「現世」に顕現した瑞像としての「浄土」像であるということになる。この念持仏厨子あるいは念持仏自体を心に念じることこそが、当時の仏教者に不可欠とされた修行に他ならず、橘三千代（665?～773）も、仏教的真理を「観る」ために、日々、この念持仏を本尊として阿弥陀浄土を観想していたものと推測する。

続く、梯論文は、源信（942～1017）の『往生要集』を取り上げ、その地獄観の特徴について検討する。『往生要集』の序文によれば、浄土教の体系は膨大複雑であり、凡夫には修め尽くすことができないが、「念仏」のみを取り上げて、凡夫にも修得可能な往生極楽の方法を提示することが同書の目的とされる。氏によれば、源信が最も重視したのは、自身が往生してゆく姿を観想する「自往生観」、具体的には、「白毫観」すなわち、弥陀眉間の白毫より放たれる光の中に自身を位置づけ、光明摂取の実現を確認すること、であったという。源信は、平生においても臨終においても、自分自身を心象世界の中央に置くような観念を勧めていると指摘する。梯氏は、本論考において、『往生要集』「厭離穢土」の章を再検討し、行者が、地獄の罪人を第三者として想念するのではなく、自分自身が今まさに地獄で苦を受けているような状況を観ずることを可能にする様々な記述上の工

夫がなされていると指摘する。古代日本には、仏教絵画や経典の伝来を通じて、断片的ながらも様々な形で地獄のイメージが伝わっており、それを初めて体系化した点に『往生要集』における地獄観の意義があるが、本稿はその具体相への接近を試みる論考である。

今井論文は、本論集において、唯一、西洋美術史の視点からの論考である。氏によれば、「天国」についての厳密な定義は、旧約聖書にも新約聖書にもみられず、「神の国」あるいは「天の国」という言葉が用いられるのみであるという。キリスト教美術では、4～5世紀以降、「最後の審判」図像が確立したとされ、初期フランドル絵画でも「最後の審判」図像は多数描かれるが、そこでは、「天国」という「他界」の表現が、拷問に苦しむ人々が生々しく描かれる「地獄」と比べるとあまり具体的に描写されていない点を指摘する。初期フランドル派の画家、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（1399頃～1464）が15世紀中頃に制作した《ボーンの祭壇画》は、ニコラ・ロランが貧者のために設けた施療院「神の家」に設置する目的で発注したものであるが、そこには、病める貧者たちに「他界」へと向かう心の準備を促すとともに、注文主たちの肖像を「最後の審判」に含め、彼らの救済を約束するかのような具体的なイメージが提示されており、注文主ロランの自己顕示欲と「天国」への執着が読み取れるという。当該期の西洋キリスト教美術において、「他界」としての「天国」の図像表現の中に、きわめて世俗的な心性が埋め込まれていると指摘する。

巻末に所収する藤澤論文は、葬送儀礼時に死者を悼んで詠まれる「挽歌」に注目する。なぜ「挽歌」というのか、その背後に、「棺を挽いた記憶」が残されていたのではないかと、という着想に基づき、古代中国から近世日本に至るまで、様々な関連事例を博搜し、「挽歌」とは棺を墓壙に下ろす時に輓轆を「挽く」歌であるという解釈を提示する。さらに氏は、中国における墓碑が本来、降棺具としての機能を有していたとする説を引くとともに、日本においても古墳時代前期の松岳山古墳（大阪府柏原市）の竪穴式石槨に伴う「穿孔立石」を取り上げ、この穿孔が輓轆（滑車）装着痕である可能性を示唆する。氏はさらに、中世・近世・近代における、「輓轆の記憶」を丹念に辿った上で、「降棺のための輓轆のイメージ」の背景には、「死後の世界を垂直軸で考えるのか、水平軸で考えるのか」という問題」と通底することを指摘する。もちろん古代の死生観には垂直的なものと水平的なものが重層化している筈であるが、少なくとも、輓轆技術には、垂直的な死生観の記憶が潜んでいる、というのが藤澤氏の結論である。

以上、論考5篇の内容を、拙稿も含めて簡単に紹介したが、筆者による拙い紹介など読み飛ばして、各論考へと直接赴いて頂きたい。本論集では、地域・時代を異にする論考を併載することにより、「他界観」に関する最新研究の一端を多角的に提示することを企図したが、当該研究の奥深さと潜在的可能性については十分に示し得たのではないかと自負している。数年後に、別の視点から、他界観について再論する機会があることをひそかに期待して、緒言に代えたいと思う。

（文責 犬木 努）